

招詞：マタイ16：15～19

聖書箇所：マタイ18：15～20

タイトル：「愛に根ざして真実を語る」

テーマ：教会に与えられた権威「解くこと」「つなぐこと」の意味、そしてそこに表される神の愛と赦し、教会のあり方について考える。

1. 教会について

イエスは地上生涯で2度だけ「教会」について語っておられます。（「教会」という言葉が使われているのは、4福音書の中で本日の招詞で読んでいただいたマタイ16：18と、今お読みしたマタイ18：17だけです）

ペテロが「あなたは生ける神の子キリストです」と告白した後、イエスは「それを明らかに示してくださったのは父なる神である」と言われ、そのペテロの信仰告白の上に「わたしの教会を建てます」、さらにペテロに「天の御国のかぎをあげます」と続けられました。そのかぎとは、教会が「解く」「つなぐ」に関わり、教会の決定が天の決定になるという驚くべきものでした。

2. 教会に与えられた権威

マタイ16：19の「解く、つなぐ」という言葉と、18：18の言葉は同じ意味を持っています。これをひとことで言うと「罪をゆるす、あるいは赦さない」権威が教会に与えられているということです（解くとは無罪宣言であり、つなぐとは有罪宣言です）。誤解がないように申し上げておきますが、教会が永遠のいのちに関わる罪を赦す権威を持っているということではありません。罪を贖い、永遠のいのちを与え、新しいいのちに生きる道を与えて下さるのはイエス・キリストであり、私たちはイエス・キリストを信じる信仰によって救われているのです。このイエスというお方を救い主と信じ、「あなたは生ける神の子キリストです」と告白する者たちが呼び集められたのが「教会」です。

キリストをかしらとする教会は福音書の時代はまだ存在していません。教会が現実存在するようになったのは、聖霊が降られたペンテコステの日以来です。

イエスの弟子たちにとって、主の言われたとおり教会が誕生し、信じる者が呼び集められて、具体的な働きが進められていく中で、教会に与えられた「解く、つなぐ」という権威が教会に生じてくる問題に対処する上で、どれほど重要で役に立ったかは想像に難くありません。

イエスを信じて救われたものの、依然として罪の性質を持つ者たちの集まりですから、現代の教会と同じように様々な問題がありました。

3. 教会の権威を正しく行使するための手順と注意点

イエスはマタイ18：15～20で、教会の兄弟姉妹が何か罪を犯した場合に、教会がどのように対処するかを具体的に語っておられます。その手順とは、

- ①それに気づいた人が罪を犯した人のところに行って、二人だけで話す。
- ②聞き入れない時は、他に一人か二人の証人を連れて行く。この証人によって事実を確認する。
- ③それでも聞かない時は、教会に告げる。
- ④教会のいうことも聞かないなら、彼を異邦人か取税人のように扱う。

これを教会から除名すると受け取る考え方もありますが、B I Cは、その人を未信者と同じに扱い、もう一度その人をキリストのもとに取り戻すために伝道し直すのだと捉えています。イエスが語られた罪を赦す手順は、兄弟姉妹を再び得るという点に焦点が当てられます。兄弟が真の悔い改めに導かれて、再び教会の交わりの中に回復されるプロセスというわけです。

*以上のプロセスの中で絶対に必要なこと

ここで、「解く、つなぐ」という言葉の真の意味が理解されないなら、教会はとんでもない事態に陥ることでしょう。「解く」ということはその罪を赦すということ、「つなぐ」とはその罪を赦さないでおくということです。教会が赦すと決めたら、天もそれです承し、教会が赦さないと決めたら（たとえば教会からの追放と決めたら）天もそれです承するということです。

たいへんな権威を教会が与えられているわけですが、この権威の行使を一步間違えば、教会は恐ろしい組織になります。神に成り代わって、神の名において勝手な規則を作って信徒をがんじがらめにすることも可能になります。この事態に陥らないために、教会の懲戒となる事例も聖書のみことばによって判断する必要があります。また、聖書全体から、何を罪としているのかを知る必要があります。ここでは、パウロが書簡の中で触れている教会の懲戒の対象となる事例をいくつかあげてみます。①あやまちに陥っている兄弟（ガラ6：1）②怠惰な生活を送っている兄弟（Ⅱテサ3：6）③偽教師（Ⅱテモ2：17，18）④分裂や分派を起こす兄弟（テト3：10）⑤不品行な兄弟（Ⅰコリ5：9～13）などがあげられています。懲戒の目的は、罪を犯した兄弟を悔い改めに導くことです。

ここで次のイエスの言葉が続いていることを見逃してはなりません。「まことに、あなたがたにもう一度告げます、もしあなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

「まことに」とイエスは弟子たちの注意を喚起しています。この地上で心一つにして祈るふたりは、兄弟の罪に気づき、はじめに言いに行った人と、その助言が聞き入れられなかったので連れて行った証人と二人です。その証人が二人だった場合は三人ということになります。

神の正しい導きを求めて、この二人か三人が心を合わせて祈るなら、神はその解決のために正しい導きを与えてくださるという約束です。イエス・キリストの名において集まり、真実に主の御心を求めるなら、その人々が下す決断に主も加わってくださるという意味です。

赦すために行われる手順の中にどれほど、それに関わる人々の真実な態度と祈りがあるかが問われているのです。神の御心にかなった決定は神がそれをよしとされるということです。

ときどき誤解されて二人でも三人でもキリストの名において集まる所が教会だと言う人がいますが、それはここの真意ではありません。4つの赦しの手順をイエスが認めておられ、愛をこめて行うこれらのステップの中にイエスが共におられるという意味であります。

* 純粋な教会

Ⅱコリント11：2～3には、教会を清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたと書かれています。さらに「万が一にも教会の思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはならない」とパウロは言っています。

B I Cの信仰者は、この純粋な教会すなわちキリストの花嫁として教会がふさわしく整えられるために、罪を犯した兄弟姉妹が悔い改めてキリストのもとに立ち帰ることを切に願って、キリストの手順を踏むのです。その土台にあるスピリットは、私たちは互いに弱い者であるからこそ、他の兄弟姉妹の助言や助けが必要なのだという思いです。そして、赦し、受け入れるというステップの中に「相互説明責任」という、愛に根ざして真実を語ることの大切さを見出しているのです。

それを阻むものが今日の教会の中にはいくつもあります。「素顔の再洗礼派」という書物の中で、著者のスチュアート・マレーは次のように記しています。

- ①個人主義（信仰を個人的なものと考え、教会のかしらなるキリストにつながるキリストの体の一部という自覚がない。彼らの願いは個人的成長と個人の幸せ）互いに責任を負い合うという自覚がない。
- ②倫理を私生活に限定する考え方。教会の倫理性を問わない。
- ③不明瞭で無批判な「寛容」の精神（聖書に基づかないただのヒューマニズム）など。

以上の原因をたどると、そこには聖書のみ言葉に対する無知があると思われます。聖書のみ言葉を個人流に勝手解釈しているか、そのみ言葉の存在さえ知らないことがあるでしょう。教会はみことばを正しく解釈し、共通の理解を持つための共同体でもあるのです。

4. 愛と赦しの共同体として

私たちが、互いを尊重し、きよい教会の一員として成長したいと願うなら、相手を思いやる愛ゆえに真実を語るでしょう。それが兄弟姉妹を真に愛することだと考えるからです。愛に根ざして真実を語る以外に、私たちは教会の中で真の友情を育むことは出来ません。偽りを語る人とは友になれないからです。私たちがあのアブラハムのように神ご自身とも真の友情を持ちたいと願うなら、神の前に真実を語る以外ないのです。それが神を愛することだからです。人間同士でも同じことです。

愛する故に厳しいことを言うことは、私たちの家族関係のなかでもおおいにあることです。厳しい中にもそこに愛が表現されることは非常に重要なことです。今まで私たちの教会

でそのように実行されてきたかは意見のあるところでしょう。しかし、教会という共同体は、イエス・キリストが教えて下さった赦しのステップの中に、神の愛と兄弟姉妹に対する愛を表現していく神の家族です。家族は何をしてもかまわないという関係ではありません。私たちは、キリストにあって互いに責任を負い合い、互いを尊重するのです。

愛をもって真実を語るという相互説明責任は、陰口や中傷をやめさせ、内輪もめや仲間割れを防ぐ自衛策であり、霊的成長の糧であります。人間関係が壊れてしまった問題の中に必ず、事実誤認と愛をもって真実を語ろうとしなかった不実さがあると思われまます。本気で修復しようとするならば、私たちは真実を語らねばならないのです。

口先だけでなく、真に愛すること赦すこととは何かをもう一度よくよく考え、聖霊の助けをいただきましょう。教会がイエス・キリストによって与えられた「解く、つなぐ」という権威の真の意味を発見し、互いに真実を語り、愛し合い赦し合うことのできる共同体に成長させていただきましょう。